

# 町家ペンキ塗り替えボランティア活動 1997年 in HAKODATE

■ 1997年8月30日（土）、31日（日） ■



before



after



←左

(9) 函館どっく㈱社宅：1944(昭和19)年、弥生町6-17  
【塗り替えの配色】外壁下見板：クリーム色、窓枠・柱等：うす茶色の2色

→右

(10) 旧おぐら理容院：1907(明治40)年、弥生町6-15  
【塗り替えの配色】外壁下見板：淡いピンク色、窓枠・柱等：こげ茶色の2色

●塗り替え対象物件の選定理由：「三軒効果町並改善」をめざし、西部地区の中で、三軒以上の洋風下見板張り町家が建ち並んでいるところとして、弥生町周辺にエリアをしぼり、現地踏査をおこなった。いくつかの候補の中で、弥生町6番において、ほぼ一軒おきに建ち並ぶ3軒一函館どっく㈱社宅、旧おぐら理容院（小倉家所有建物）、たこやきみっちゃん他（梅木家所有建物）を有力候補とし、選んだ。

●塗り替える色の方針：今回は通りに建ち並ぶ3軒をまとめて塗り替えるので、その色を検討するにあたり、はっきりとした方針が必要であると考えた。①3軒それぞれの色に、ある関係、物語性が必要である。3軒とも違う色だが、3軒並ぶとある種の調和があり、歩きながら眺めると色が徐々に変化していくようなものとして考えた。②旧おぐら理容院とたこやきみっちゃん他については、現状がピンク系の色で、この色は西部地区の特徴的な色の一つであり、近くの大正湯でも用いられている色なので、これを基本に用いる。ただし、少し色合いを遠えるようにする（全く同じものにはしない）。③函館どっく㈱社宅については、周辺の建物が建て替えや修繕などにより外壁に新しいサイディングを貼っているものも多く、その色がほとんど白系であったので、これと調和する同系統の白色、クリーム色がよいと考えた。以上に加え、外壁と窓枠・柱等との塗り分けも考慮してCGによるシミュレーションをおこない、微妙な色の違いを比較しながら検討した。その結果、①函館どっく㈱社宅では、外壁を白色に近い淡いクリーム色+窓枠・柱等を渋めの薄茶色（外壁のクリーム色にありような）、②その隣の旧おぐら理容院では、外壁を淡いピンク色+窓枠・柱等をこげ茶色（函館どっく㈱社宅のクリーム色+薄茶色にありような）、③たこやきみっちゃん他では、外壁を濃いめのピンク色（旧おぐら理容院の淡いピンク色にありような）+窓枠・柱等を白色（旧おぐら理容院とは違う塗り分けで、かつ函館どっく㈱社宅のクリーム色にありような）、に決定した。

【参加者】ペンキ塗りボランティア代表者・松本 謙、高橋 毅、渡辺正憲（以上北海道大学大学院工学研究科建築設計学専攻・修士課程1年）、市原正大、大島英司、小林博樹、バダラハ・バタボルド、高野研修（以上北海道大学大学院工学研究科建築設計学専攻・修士課程2年）、青柳 剛、島毛 伸、岡本浩一、倉内菜々、佐藤隆子、吉田色央（以上北海道大学工学部建築都市学科建築設計学専攻・4年）、比戸麻紀子、森下 潤（北海道大学大学院工学研究科建築設計学専攻・修士）、有馬勇一、太田真也、北村祐基、小山 剛、今 和弥、栗原洋介、新保勝利、栗原慎介、石澤 謙、田宮優子、早坂 聡、藤田洋幸、三川賢二、村山美貴子、吉澤裕治、吉田健吾（以上函館工業高校・3年）、太田誠一（元明建築部）、以上33名

【協力者】梅木慎一郎（建物所有者、お金の差し入れ）、小倉和孝子、函館ドック（以上建物所有者）、内海広子、藤川寿伸、木村弘弘（以上居住者）、たこやきみっちゃん（建物使用者）、函館工業高校建築科教諭・吉村富士夫（函館工業高校生のボランティア手配）、第一建設商・坂田憲一（足場の手配）、日本ペイント販売北海道支社・米沢猛夫（ペンキ塗料の手配）、函館からトラスト事務局・鎌倉純一・河内昌子（女子学生の宿泊受け入れ）、ハク等ペンキ用具の保管、軽トラック）、太田誠一（男子学生の宿泊受け入れ）、元明建築部・山本真也（此建築物の助言）

※以上敬称略



before



after

